



環境社会学会ニューズレター

JAES Newsletter

19(通号 24) 1999.4.5 環境社会学会発行

【学会事務局】〒180 東京都武蔵野市吉祥寺北町 3-3-1 成蹊大学文学部 高田研究室
Tel:0422-37-3675 Fax:0422-37-3875 E-mail:aki@fh.seikei.ac.jp
郵便振替口座:00530-8-4016 口座名:環境社会学会
URL:<http://wwwsoc.nacsis.ac.jp/jses3/>

目 次

| | |
|--|---|
| 1. 環境社会学会第 19 回セミナー開催について | 1 |
| 2. 第 18 回セミナーを振り返って | 2 |
| 3. 環境社会学会のホームページ (http://wwwsoc.nacsis.ac.jp/jses3/) | 5 |
| 4. 会員情報 (住所・所属変更、新入会員) * プライバシー保護のため省略 | 5 |
| 5. 編集後記 | 6 |

1. 環境社会学会第 19 回セミナー開催について

鶴飼照喜 (信州大学教育学部)

「豊かな自然にあこがれて」が県外からの信州大学受験生の声であり、県外の学会に出席すれば同様の言葉が挨拶代わりである。しかし、最近の長野県は五輪疑惑で注目をあび、昨年は飯山市での堆肥センター問題でも全国的な話題となった。

今回のセミナーでは五輪関連施設と産廃処理場をめぐるエクスカージョンを組みました。あわせて自由報告を募集しますが、できれば上記と関連する形のを期待しております。

テーマ：中山間地の環境問題

場所；長野県更級郡上山田温泉

日時；5月29日(土)～5月30日(日)

参加費；5000円(エクスカージョン含む、補助があれば減額)

宿泊費予定；1泊2食8000円

参加および自由報告の申し込みは、同封の葉書でできるだけ早めをお願いします。

日程

5月28日 運営委員会、編集委員会、遠方のため宿泊希望の方。

5月29日 エクスカーション(長野県北部地方の産業廃棄物処分場および長野オリンピック施設の見学)

9:00 上山田温泉のホテル発

10:00 JR長野駅発、豊田、飯山方面：産廃施設見学

12:00 昼食、その後、志賀高原、長野市内：五輪施設

16:00 ホテル着

16:30 環境社会学会総会(運営委員選挙)(18:00終了予定)

19:00 小講演会、地元との交流会、懇親会、

講演：長野県の産廃問題の現状 関口鉄夫(著述業)

上山田町の環境政策について 宮原友治(上山田町役場住民課専門幹)

5月30日 研究集会・自由報告

9:00 自由報告(報告数により会場および時間の変更あり)

問い合わせ先および自由報告申し込み先：信州大学教育学部社会学研究室

第19回環境社会学会セミナー事務局：鶴飼照喜、野外活動：渡辺隆一

〒380-8544 長野市西長野6、Tel.026.232.8106、Fax.026.234.5540

Email trsukai@gipnc.shinshu-u.ac.jp

{自由報告の申し込み締め切りは、4月末日です}

2. 第18回セミナーを振り返って

第18回セミナーは「環境社会学における自然と文化」をテーマに、関西学院大学で開かれました。報告は、文化庁の下間久美子さん、屋久島の民宿経営の長井三郎さん、阪南大学の吉兼秀夫さんをお願いし、滋賀県立大学の日高敏隆さんに全体のコメントをしていただきました。今回は吉兼さんに代表して書いていただきました。(16ページの写真参照)

地域全域に展開する博物館・エコミュージアム

--地域の記憶の井戸を掘り、掘り出された遺産相続の仕掛けづくりとその運動--

阪南大学 吉兼秀夫

フランスにおいてG・H・リビエールが1960年代に提唱したエコミュージアムという概念が1980年代に日本で新井重三氏の紹介を中心に広まり、その活動が展開をはじめている。山形県の朝日町をはじめ、徳島県板野、上板、土成3町、岩手県東和町、千葉県富浦町の他、静岡県、埼玉県においても展開中であり、また、鹿児島県奄美大島の笠利町の古代村構想や大阪市平野区の町ぐるみ博物館活動もエコミュージアムの精神を持った活動として注目されている。また、文化庁、環境庁もエコミュージアムの名を冠した事業を行っている。

H・リビエールの定義では「エコミュージアムは行政と住民が一緒になって構想したり、作り、経営する装置である。エコミュージアムに対し、行政は専門家と力をあわせて施設や資源を提供し、住民は彼らの熱意にしたがって知識や能力を提供するのである。

エコミュージアムは住民が自らを理解するために映し出す鏡である。その鏡に彼らが求めるのは自分達が深くかかわる地域（テリトリー）についての解説である。その解説は世代の連続性と不連続性の中で彼らの先祖が施した解説と結合された解説である。エコミュージアムは住民が彼らの仕事や行動、親密性に誇りを持って自分達をよりよく理解してもらうために訪問者に示す鏡である」（G.H.リビエール、1989「La Museologie」、p142・吉兼秀夫、1993「エコミュージアムの概念と実態」『環境文化研究所研究所紀要』No4.p3）としている。

筆者が7～8年にわたってフランスの事例を含めて調査し、実際に企画に関わる中でその内容は大体次のようなものとして認識するに至っている。「地域の中にいくつかの限られた美しい景観や自然、大事な文化財や記念物があるというのではなく、地域の中にあるすべての素材に価値があり、それらが一体となっはじめて地域は地域となると考えるのがエコミュージアムである。それは一定地域（テリトリー）の地域の記憶の井戸を掘り、掘り出された記憶（遺産）を地域全体の中で保存・展示・活用していく博物館である。それは地域遺産の遺産相続の仕掛けづくりとそのための運動であるとも考えられる。エコミュージアムは従来の博物館のように建物の中に資源を集めて展示するのではなく、テリトリー全体を展示室として、地域の遺産・記憶を本来の場で保存しようとするものであり、地域の姿を映す鏡を構成するのである。また、収集・保存しようとするものはあくまでも住民のそれである。エコミュージアムの主体は住民であり、その住民がアイデンティティを感じる領域（テリトリー＝文化圏）の中で大切にしたいという記憶を住民さらには来訪者にも理解できるように工夫し、つまり地域を等身大で映す鏡を作り、その鏡を通して将来の地域像を考えていこうとするものである。エコミュージアムはコアとサテライト及び発見の小径によって構成されるのが一般であるが、それらを、ボランティア住民などによって自主的、主体的に運営しようとする。それは何気なく訪ねて否応なく理解する生涯学習機関でもある。」（吉兼秀夫「フィールド博物館とエコミュージアム」所報『環文研』vol.51,1998.12）

報告では、エコミュージアムのキーワードとして（1）テリトリー（居住住民がその存在をシェアしている文化圏＝博物館の建物の大きさにあたるもの）（2）遺産（記憶＝収集する対象）（3）住民（＝運営の主体）を紹介した。また、エコミュージアムの構造として取り上げられるコア、サテライトはフランスの場合個々にアソシエーションというNPO組織（友の会や保存会と言った方がイメージしやすいかもしれない）によって運営され、守られていることが多いことを述べた。アソシエーションとはフランスで1901年に制定された「アソシエーションの契約に関する法律」によって、「二人またはそれ以上の複数人が、非営利的な目的を持って、知識や活動を永続的に共有する協約体」と定義されているボランティア組織のことである。（詳しくは岩橋恵子、1997、「フランスにおける博物館運動とボランティア－アソシアシオン・エコミュージアムの意義をめぐって－」、日本社会教育学会編『ボランティア・ネットワーク』1997参照）こうした性格を内包するアソシエーションによるエコミュージアムは、地域における遺産の保護にとどまらず、

住民の主体形成の契機をもたらし、地域アイデンティティ形成に寄与し、ひいては地域振興に貢献するのである。そしてもう一つエピソードとして次のようなこととお話した。フランスのエコミュージアムの事例の中で、コアと呼ばれる施設が城であったり、豪農の館や地域を代表する企業の建物であったりすることが多い。

エコミュージアムが大切にするのは住民の記憶であり、貴族や王侯など富裕層のそれではないはずであるのになぜなのか。それは、まさにそのような庶民が手の届かなかった施設を今住民の手に取り戻し、アソシエーションの活動の場になることが意味があるのである。地域文化・環境文化の自分化作業の一種といえよう。活用によって関係が生まれ新たな環境文化が創出されるということである。エコミュージアム活動とは環境（自然環境も歴史的環境も）との関わりを取り結ぶ活動であり、かつての関わりを想起したり、継承したり、新たな関わりを創造するものである。そしてその関わりは「利」を優先するのではなく「理」にかなった関わりを優先すべきものである。結果「利」にもかなってこることが望ましいだろう。

なお、司会者から発言の要望のあった観光との関わりについては、以下のようなコメントを行った。「エコミュージアムは本来地域の文化の再発見とこれを生かした地域振興に目的があり、住民に向かって行う活動としてはじまるが多かったが、実際には住民よりも来訪者が利用することが多く、また、この観光客の利用が「観光のまなざし」を通して経済効果と地域再認識効果（観光客の驚きや喜びの姿を見てわが町の価値を認識する）のあることに気づき、最近では観光客の誘致に積極的なところが多い。」なお、その後（12月5-6日）開催された観光研究学会で、エコミュージアムが観光に迎合的でないゆえにかえって観光魅力を持つことを確認した。

最後に、フランスのプレス・ブルギニオン・エコミュージアムの事例をスライドによって紹介した（この内容については拙稿「プレス・ブルギニオン・エコミュゼ」『エコミュージアム理念と活動』牧野出版）1997参照）が、この事例から次の点を指摘した。

- ・単なる古いものの保存ではない。（プレスのエコミュージアムの場合、コア、サテライト、発見の小径とも新施設ではなく、地域の記憶のしみこんだ既存施設が活用され、新たな機能を課して地域に息づかせている）
- ・住民による関わりの存在（ほとんどのコア、サテライトにアソシエーションやボランティアグループがいて運営に参加している。人々の関わりが新たな創造を可能としている）
- ・環境文化の注目（もの自体の収集保存ではなく、そこには人が介在し、人と環境、人とももの関わりとその変化が注目され、関わりの中で生まれる環境文化が注目されている）
- ・水脈に達する記憶の井戸（1つ1つの記憶の井戸が同じ水脈に達することを感じさせ、地域環境理解を深めている。どんな些細な記憶の井戸からも大きな流れに達する可能性をあらわしている。自然環境と文化環境の一体性についても示唆的である）

会場からの質問の中に記憶の井戸が異なる水脈に達した場合どうするのかというものがあつた（例えば先住民文化と新住民文化など）。この場合、まずは異なる水脈をそれぞれテリトリーとするエコミュージアムが生まれることになるだろう。そこではお互いがお互いの水脈を尊重することが基本となると思う。同時に、水脈が重なる部分で新たな流れ（文

化)を模索したり望む住民があらわれた場合は、別のエコミュージアムを新たな文化創造を目指して立ちあげることになるのではないかと思う。なお、イレコ状のエコミュージアム(支流域のエコミュージアムと本流域を含むエコミュージアムの存在)やエコミュージアムのネットワーク(上流域のエコミュージアム同士がネットワークを組んで、相互交流するなど)もあり得るものと思われる。但し、私の知るフランスや日本のエコミュージアムの中ではそのような形態はまだ出ていないようである。

3. 環境社会学会のホームページについて (<http://wwwsoc.nacsis.ac.jp/jses3/>) 飯塚邦彦(成蹊大学大学院博士課程)

待望の環境社会学会独自のホームページが立ち上がりました。これで本学会も情報化の波に乗ることになります。これからは情報ネットワークの利便性を積極的に使って、会員の皆様との直接交流、さらには分野を超えた方々との交流も深めていきたいと思えます。以下は、実際にホームページ作成にあたった事務局スタッフ・飯塚君のコメントです。

環境社会学会のWebページ作成の実作業にあたりました飯塚と申します。まだまだ情報が少なく、内容的にはこれからといった感じですが、鋭意情報を充実させてゆきたいと考えております。

とりあえずの予定としては、ニュースレターのバックナンバー掲載、自動入会手続きシステムの導入、アクセスカウンタの設置、BBS・チャットの開設などを考えております。ゆくゆくは、会員間の情報交流だけでなく、外部の環境諸団体との生きた情報交流の場にしたいと考えております。

「こうした方がよい」といったご意見、また「こうした情報が欲しい」といったご希望などありましたら、どしどしお寄せください(BRB03511@nifty.ne.jp)。積極的にページに反映させていきたいと思えます。また具体的なプランなども大歓迎です。

4. 会員情報

* 会員のプライバシー保護のため省略させていただきます *

5. 編集後記

一体いつになったらニュースレターが出るんだ、とお思いの方がけっこうおられるのではと恐縮しております。5ヶ月ぶりです。第19回セミナーの案内が間に合わないぞと鶴飼さんに怒られそうですが、返信用の葉書を同封しましたので、みなさんなるべくお早めにセミナー事務局にご連絡ください。特に報告予定のみなさんは、4月末日が「自由報告」の申し込み締切ですので、どうかご注意ください。

今回のセミナーは、恒例の現地でのイクスカーションもありますが、環境社会学会の総会も開かれます。運営委員の選挙もありますので、みなさんできるだけご出席ください。

1998年度の会費の納入率は76.94%でした。97年度よりはやや改善されました。今回は金額を書いた郵便の払込用紙をみなさんに同封しましたので、さらに納入率がアップするものと期待しております。また、ニュースの新入会員の欄をご覧になればわかりのように、様々な分野の方がどんどん入会なさっています。ホームページもようやく創りました。セミナーでの自由報告も増えていきますし、『環境社会学研究』の評判もいい。環境社会学会はなおも順調に発展していると言えそうです。それでは長野でお会いしましょう。



第 18 回セミナーシンポジウムのパネリストのみなさん
(左から長井三郎さん、吉兼秀夫さん、下間久美子さん、日高俊隆さん)



第 18 回セミナー会場風景 (関西学院大学)